
白き終焉

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き終焉

【Zコード】

N6449K

【作者名】

Tomiono

【あらすじ】

ホラー小説です。ちょっとグロテスクです。

「白き終焉」

タイトルをつけただけの書きかけの小説が、古いノートパソコンの画面で光つた。時々、データが消えたりするんじゃないか心配になるほど古い型だが、これはこれで重宝している。頼もしい相棒だ。俺はコーヒーをすすり、まじまじとコンピューターの画面を見つめた。

気分転換にネットを適当に閲覧する。ページの上でニュースのヘッドラインが流れる。

「クリスマスの日本、景気の行方は？」

「新型インフルエンザ、感染者増える。厚生労働省、統計を発表・・・」

「星に願いを！　ふたご座流星群地球に急接近」

どれもつまらなさそうなニュースだ。

外からはしゃぎ声が聞こえる。夜中の十一時だというのに。窓を開けると、外ではさつきまでパーティーで飲んでいたであろう大学生が道で車に腰掛けうるさく騒いでいる。空は美しく黒く、数え切れないほどの星が瞬いている。遠くに黒雲が見えた。

急に眠気が襲つて來たので、俺はカーテンを閉めてコンピューターの電源を切り、電灯を消して床のマンガ本を避けて布団にもぐつた。俺はそのまま深い眠りに落ちていった。

突然、眠りを吹き飛ばす地響きが轟いた。

俺は目を開け、ベッドから飛び出た。静寂を切り裂いた低い轟音は、まだ続いている。赤とオレンジの揺らめくような光が窓から入つて来る。俺は急いで飛び上がり、ブラインドを開けて窓の外を見た。

外は火の海であった。

「なんで・・・・・・」思わずつぶやいた。

見慣れた住宅地の景色は、そこには無かつた。見渡す限り、黒煙と業火しかない。少し窓に近づくと、すさましい熱気で顔が焼けそうになる。ベランダも毛皮のような炎で覆われている。

俺は電灯のスイッチを叩いた。点かない。

窓から入つて来る光を頼りに、俺は床の散らかりを乗り越えて階段を駆け下りる。

「父さん！」

居間には、既に父さんがいる。ちよつビ母さんと一緒に爆睡中の弟と妹を運び終えたところだった。

父さんは急かすようにいう。「早くこの家を出るぞ！　上のお前の部屋以外には火が入り始めている。急いで非常食と水を持って、脱出だ！」普段は温厚な父さんのとがった口調が、更なる緊張感を生んだ。

家の前の歩道と道路は燃えていなかつたものの、コンクリートは熱を吸つて柔らかくなつているように見えたので、セメントの歩道を走るようにした。叩き起こされた弟達も、何がなんだかわからぬまま非常食を持たされ、俺と両親と一緒に走り始めた。四方から包み込んでくる熱気が痛かったが、みんなかまわず走り続けた。

近くの小学校の駐車場は、停められている何台かの車を避けねば、十分に熱気を逃れられる場所だった。そのため、近隣の住人達がここに既に大勢集まつっていた。誰もが、突然の事態に戸惑っていた。父さんは周りの人々に事情を聞きまわつてみたが、誰もわからないようだつた。

突然、誰かが断末魔の叫びをあげた。

「キヤーッ！！！」

振り向くと、悲鳴の主は既に死んでいた。悲鳴をあげた年老いた女性は、みたことも無い生物の腕に串刺しにされている。謎の生物は、まるでゲームにでも出てくる様な、奇怪な体型をもつていた。イカに似ていた。死靈のような透き通る長い筒型の頭の先端は尖つ

ており、足も十本ほどあった。ただし、足の一本一本はホースほど
の長さと直径しかもつておらず、2メートルを超える長さの頭部を
支えるにはいさか不十分な感じもした。丸い、乾いた灰色の二つ
の眼には生気がなく、俺はそのイカらしきものと比較的遠かつたも
のの眼があつた時は背筋が、いや、体全体が凍り付いた。

化け物は、音も立てずに老婦の死体を頭部の真下へと引き寄せ、
死体の上に乗つかつた。頭部の下には鋭利で屈強な歯が生えている
のだろう、バキボキと、老婦の年老いた骨がくだけるのが聞こえた。
ジユルジユルと死体の体液を吸うのが聞こえた。怪物の下には血の
海が出来た。しかし、怪物の体自体は血にまみれながらも不気味な
ほど白くあつた。

「うつ、と、周りの人人が地面に倒れ、吐き始めた。

誰かが耐え切れずに悲鳴をあげた。場にいた全ての人人が我に返り
パニックに陥つた。

「助けてくれ！」と、一人の若い男がその怪物から遠ざかりたいが
ために、燃え続いている業火の中へと走り去つた。しかし、その男
はすぐに戻ってきた。跳ね返つてきた、というべきだろうか。また
しても、心臓を化け物の巨大な触手で貫かれた死体が、駐車場に投
げ出された。

炎の壁を易々と通り抜けて、また別の怪物が現れた。怪物は、足
をぐつと曲げたかと思うと、甲高い笑い声を上げながら飛び上がり、
歯をむき出しにして若い男の死体に飛び移つた。そして、死体をむ
さぼり始めた。

駐車場が朱色の血に染められていく。

誰もが一目散に逃げ始めた。何が何だかわからない。とにかく逃
げなくてはならない。

俺も怪物から遠くへ、と、正面の火の壁の中へ突っ込んで、力の
限り走り出した。

逃げ切つたのだろうか。俺は近所の市民プールの建物の近くにい

た。プールの建物は頑丈なレンガ造りの家であり、燃える建材がないのか、この世の全てを焼き尽くしているかのような劫火の中でも、燃えずにつつていた。

怪物たちはまだ、炎の中を逃げ回っている人々を追つているのだろうか。

俺はプールのロッカールームのようなどころに身を潜めた。時を少しして、同じく逃げ回っている人がロッカールームにやつてきた。向こうは最初、俺が居ることに気付いていなかつたらしく、飛び上がるほど驚いた。

「うわっ！ ああ、人間か・・・・・！ 俺はてっきりまたイカの野郎がいたのかと・・・・・」

俺はその愉快な言い草に笑つた。「見ての通り、イカではありませんよ」

男は、俺の横に腰を降ろした。足を怪我しているようだつた。よくそれでここまでたどり着けたものだ、と俺は感心した。また、全身にひどい火傷を負つていて見えた。炭や泥や血で全身が覆われている。

「くそ、一体何だつてんだ・・・・・・」男は今にも泣きそうだった。涙が出そうになつたのを、隠そうとしてゴシゴシと顔を手で拭いた。

「あっ！」俺は言った。「あなたは！」

「ん？」

炭や泥が取れたその男の顔は、間違いなく見覚えのある漢方医のそれだつた。よく母が近隣で唯一便りになる漢方医だと、俺を使いにいかせていたのを思い出した。俺は自分の家族について話した。

「お前は！ うちのお得意様の一人の息子か！ 君も無事だつたのか・・・・・・」

「それにしても、すごい火傷ですよ。何か火傷に効く漢方薬とか持つてないんですか？」

漢方医の男は、懐から一つの小さい布袋を取り出した。「今持つ

てんのは、逃げてくる直前に調合するために持つていたこの『粳米』つて玄米だけだ。でも、効用って言つたつて、漢方医学の専門学校で習つたことをそのまま繰り返せば、『滋養強壮』ぐらいだ。火傷には効かねえよ

「そうですか・・・・・・」俺も一緒になつてうつむいた。

「どうやら、あのイカみたいなのは、近づいてきた流星の正体だつたらしいぜ。流星がひとつ、俺の家の近くに落ち、そつから火があがつてイカみたいなのがぞろぞろ出てくるのを俺は見たんだ、間違いない」

「流星つて、あの接近中だつたふたご座流星群のですか?」俺は訊いた。

「ああ、多分そうだろうな、何百と落ちてくるのが見れたからな。あの規模だ、地球の全域に落ちていたつて不思議じやないだろ?」「なんで流星の中から生き物が出てくるんですか!?」

「そこが分からんんだが・・・・・・もしかしたら、あいつらは流星の中で凍り付いていたんじやないかな。俺の推論だが。そして、大気を通過するうちに熱が溜まり、落ちた衝撃で完全に解凍されたとか。遠い星の生物なのがもしれないな。それも、炎に全く参らないことから、おそらく常に炎が燃え盛つている星とかのな」

「つてことは、世界中の人の所に、ああいうのが現れて人を殺しているんですか・・・・・・何で・・・・・こんなことになつちゃつたんじょうね」俺は呟いた。「俺たちが何か悪いことでもしたんじょうか。人間にに対する天罰でじょうか。よくあるドラマとかの人が地球を全く大切にしないから、とか人がいつまでも醜い争いを続けるから、とか、それで地球を終わらせるためにこういうのが來たとか・・・・・・」

漢方医は笑つた。「そーだなあ、そう考えられたら楽かもなあ」

「樂?」俺は立ち上がつた。「樂つて何ですか。人がこんなにも死んでいるんですよ! どんな理由があつたつて楽なわけないじゃないですか!」

漢方医は黙つてから、こういった。「なあ、そういう風に、自分の運命は自分の自業自得で回つてゐるつて考えるのは、少し思い驕るようなことになるんじやないのか」

「思い驕る？」

「ああ。今回のことでのわかつただろう、人間は弱い。地球外生物が入つてきて、みんな殺されてこの有様だ。太刀打ちも出来やしない。俺もここに来る間、色んな場所を通つたが、生きた人には会わなかつた。みんな無残な姿に成り果てていたさ所詮、大きい宇宙のスケールからみたら、人間なんてちっぽけなもんだ」

「・・・・・でも」

「でも何だ？ 運命なんてのは、あつたかどうか分かつたもんじゃない。更にあつたとしても、運命に正当性、因果応報的なものがあるなんてのはちゃんとやらおかしい。そんものは結局人がそう信じたいだけだから作り上げたことだと思うぜ。運命をつかさどる神様も・・・・・」漢方医は言葉を慎重に選びながら言つた。「神様なんて、いやしない。そんのは、人間の勝手な思い込みなんだ」そのまま一分が経つた。一人とも無言で壁にもたれかかつて座つていた。冷たいコンクリートの壁が異様なほど冷たかつた。外では地獄のような業火が燃え盛つていてるんだ。怪物が歩き回り生き残りを殺しているんだ・・・・・。自分だけ外とは切り離された世界にいるようだつた。みんなは無事だらうか。父さんは、母さんは・・・・・弟達は・・・・・。なんでこんなことにしてきなりなつたんだ・・・・・。

かすかに響く業火の音の中に、突然奇怪な笑い声が響いた。

漢方医の男と俺は息を止めた。急に手が汗ばみはじめた。

「・・・・・イカの野郎だ」漢方医は声を殺して言つた。顔に汗が伝つてゐる。

「どうしますか？」

「触手の攻撃は、ちゃんと見切れば避けられないものじやない。ただ、相手が複数いたら無理だがな・・・・・」

俺と漢方医は忍び足でロッカールームの影に隠れながら声のするほうを覗いた。イカの怪物が一匹、ゆっくりとロッカールームの中を徘徊している。

「やばい、ここにいたら見つかる……」漢方医は言った。

「とりあえずロッカールームを出ましょう」俺は言った。

俺と漢方医は、極力音をたてないように、そーっとドアを開けた。そして通り抜け、ゆっくりと閉めた。

「よし・・・・・このまま忍び足で上の階に行くぞ・・・・・」

漢方医が言つたそのときだつた。俺の手は汗で滑り、ドアは勢いよくガタンと閉まり、跳ね返つてまた少し開いた。

「しまつた！」俺は思った。

奥の角を曲がりそうだつた化け物は、急に目を光らせてこっちに振り向き、甲高い声で笑いながら飛び掛ってきた。

「逃げるぞ！」漢方医はそう言い、鉄製のドアを思いつきり閉めた。怪物の重い体がドアに当たり、ドアが曲がつた。

俺と漢方医が階段を駆け上ると同時に、怪物はドアを突き破りこちらを向いた。薄暗い建物の中で光る目玉に俺はひるんできつた。プールを見渡すバルコニーに俺と漢方医は出て、素早く物陰に隠れた。

化け物はガラスの扉を突き破り、俺達の間を通りてバルコニーの端まで行き、プールの方を見た。俺と漢方医は目を合わせ、うなづいた。

「喰らえ！」

俺達は物陰から飛び出し、怪物の頭部を後ろから思いつきり蹴つた。思ったより硬かつた。怪物は変な声を上げて、こちらを攻撃しようとしたがバランスを崩してプールの中に落ちた。

「キィイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

逃げようとしていた俺を漢方医は引き止めた。「見ろ！」プールの中で奇怪な生物は一倍ぐらいの大きさに膨れ上がり、弾けた。プールは白い脂と体液で汚く濁つた。

「おお！死んじまつた！！」漢方医は喜んで言つた。「見ろ！炎に耐性はあるが冷たい水は大の苦手らしいぞ！弱点だ！これでイカの野郎に勝てる！」

五十代の漢方医が子供のように喜んでいるのがおかしくて、俺は笑つた。「そうですね、これで対策が打てます！」

次の瞬間、鋭い触手が漢方医の頭を横から貫いた。漢方医は目を少し横に向け、そのまま倒れた。甲高い笑い声が響いた。俺が急いで横を振り向くと同時に、コンクリートの建物の屋根の上から怪物が歯を剥き出しに俺に向かつて飛び掛ってきた。

(後書き)

この作品は、毎週小説を書くという友達とやっている「合間を縫つて小説家」という非公式クラブ的なもので書いた作品です。今回の課題として与えられたジャンルは「コスミック・ホラー」と「ノンフィクション」、そして入れるべきキーワードは「粳米」「専門学校」「思い驕る」の三つでした。故にとにかくこれら非常用非日常的語句が混ざっていますが、あしからず。ノンフィクションは整合性的に無理なので半ば無視しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449k/>

白き終焉

2010年10月8日15時06分発行